

https://farid.ps/articles/apartheid_in_the_west_bank/ja.html

ヨルダン川西岸のアパルトヘイト

これまでのエッセイでは、主にガザに焦点を当ててきました。そこは今、**現代の人類史上前例のない大惨事**に直面している場所です。破壊の規模は驚くべきものです。広島の3分の1の面積しかない地域が、**7発の原子爆弾に相当する爆発力**で爆撃されています。人間の文明の痕跡はすべて粉碎されました。少なくとも**6万人のパレスチナ人が死亡**したことが確認されていますが、専門家は実際の死者数が**40万人**に近い可能性があると推定しています。これはガザの人口の**5分の1**近くに相当します。

この壊滅的な状況は、ヨルダン川西岸ではハマスも武装抵抗もないため、状況がより良いと考える人を生むかもしれません。フランスやいくつかのアラブ諸国の政府が、パレスチナ国家の承認の条件として提案しているモデルです。

しかし、その前提是危険なほど間違っています。

このエッセイでは、**ヨルダン川西岸での占領下の生活**について話したいと思います。それはより平和だからではなく、よりゆっくりと、より計算された排除のシステムだからです。爆弾や封鎖ではなく、官僚主義、土地の盗奪、アパルトヘイト法、そして入植者による絶え間ない暴力によって実行されるシステムです。

忍び寄る併合

ヨルダン川西岸は、1947年の国連分割計画ではアラブ国家の一部として指定された連続したパレスチナの領土でした。そのビジョンは実現しませんでした。今日存在するのは、実行可能な国家や一貫した領土ではなく、イスラエルのさまざまなレベルの支配下にある、断片化され縮小するパレスチナの飛び地のアーキペラゴです。これは偶然ではありません。数十年にわたる意図的なイスラエル政策の結果であり、恒久的な領土拡大、パレスチナ人の追放、土地の併合を目的としています。

イスラエル政府はヨルダン川西岸を3種類のゾーンに効果的に分割しました：

1. **事実上併合されたゾーン** – 主に主要なイスラエルの入植地とその周辺にあるこれらの地域は、イスラエルの完全な民間および軍事支配下にあります。それらはイスラエルのインフラ網に統合され、イスラエルの自治体サービスを受け、軍ではなくイスラエル警察によって巡回されることが多いです。これらの地域の入植者は、完全な法的保護、投票権、移動の自由を持つイスラエル市民です。数百メートル離れたパレスチナ人の隣人は、軍法とアパルトヘイト風の制限の下で生活しています。
2. **積極的な民族浄化が行われているゾーン** – これらは、破壊、追放、植民地化の対象となるパレスチナの農村地域です。カーン・アル・アフマル、マサフェル・ヤッタ、エイン・サミアなどの村全体が繰り返し破壊命令に直面しています。パレスチナ人の家屋は定期的に

建設許可を拒否され、違法と宣言され、イスラエル市民管理当局によってブルドーザーで破壊されます。一方、イスラエル法でも技術的に違法なイスラエルの前哨基地は、遡及的に合法化され、道路、水、電力に接続されます。水供給は入植者に転用され、パレスチナのコミュニティはタンカーに依存しています。アクセス道路はパレスチナ人に閉鎖され、「イスラエル人専用」と表示されます。放牧地やオリーブ畠は没収されるか、アクセス不能にされます。入植者の暴力は、しばしば軍の支援や無関心の下で、パレスチナ人を土地から追い出す戦略的ツールとして使用されます。

3. パレスチナ自治政府の名目上の支配下にある地域（エリアA） – オスロ合意に基づき、パレスチナの完全な民間および治安支配下にあるはずのこれらのゾーンは、イスラエルが支配する領土に囲まれたゲットー化された飛び地です。出入りはイスラエルの検問所、閉鎖、夜間外出禁止令の対象です。パレスチナ人は、ラマラ、ナブルス、ヘブロンなどの都市間を、イスラエルの軍事障壁を通らずに自由に移動することはできません。パレスチナ人が使用を禁止されている道路が、風景を横切り、入植地を結び、パレスチナの町を包囲しています。エリアA内でも、イスラエルの襲撃は頻繁です。パレスチナ自治政府にはそれらを止める権限はありません。その治安部隊は、占領下での安定を維持し、パレスチナの抵抗を抑圧するために事実上請負業者として働いています。

この支配のマトリックスは、ゆっくりとした併合の形に等しいものです。それは単一の法律や宣言によって特徴づけられるのではなく、居住地のブロック、軍事ゾーン、バイパス道路、そして支配の官僚的ツールの着実な拡大によって特徴づけられます。パレスチナ人の存在は不安定で一時的なものにされ、イスラエルの入植者の存在は恒久的で拡大し続けています。

ヨルダン川西岸に「現状」は存在しません。現状は動きです：完全なイスラエル支配と主権パレスチナ国家の展望の排除に向けた、忍び寄る、計算された動きです。毎日、地図は少し変わります—もう一つの丘が奪われ、別の村が切り離され、別のオリーブ畠が破壊されます。これは凍結した紛争ではありません。それは積極的な植民地化のプロセスです。

ヨルダン川西岸の移動：日常の賭け

ヨルダン川西岸のパレスチナ人にとって、学校、仕事、病院、または近隣の村への最も日常的な移動でさえ、**命にかかる試練**になる可能性があります。イスラエルの軍事検問所と入植者のバイパス道路は、領土を数十の断片化された飛び地に分割します。**10分のドライブ**であるはずのものが、何時間もかかったり、全く完了しないこともあります。

移動は賭けです。なぜなら：

- **検問所の予測不可能性**：ヨルダン川西岸全体に**500以上の恒久的および臨時の検問所**があります。それらのいずれもが、予告なく数分または数日間閉鎖される可能性があります。兵士は旅行者を任意に拘束したり、車両を捜索したり、理由なく通行を拒否したりできます。
- **軍事的閉鎖**：抗議や入植者の事件に対応して、広範囲の地域がしばしば「閉鎖軍事ゾーン」と宣言されます。閉鎖中、パレスチナ人は**自宅に閉じ込められ**、仕事、学校、医療の

ために出ることができません。

- **入植者道路と車両制限**：ヨルダン川西岸の多くの道路はイスラエルの入植者のみに予約されています。パレスチナ人はそれらを使用することを禁じられ、より長く、整備が不十分で、厳重に監視されたルートを強いられます。車両の没収や罰金は一般的です。
- **任意の逮捕と拘留**：どの検問所でも、パレスチナ人は起訴なしで逮捕される可能性があり、特に軍のデータベースに名前が載っている場合—未成年者、学生、または活動家が含まれことがあります。拘留は、裁判なしで数日または数ヶ月に及ぶことがあります。
- **嫌がらせと屈辱**：兵士はパレスチナ人に定期的に口頭での虐待、侵入的な搜索、数時間の遅延を課します。そのような扱いに対する法的救済や責任はありません。
- **待ち伏せと銃撃**：イスラエルの兵士や入植者が、疑わしいと見なした車両や、十分に速く停止しなかったとされる運転手に発砲した記録された事例があります。これらはしばしば致命的であり、調査が開始されたとしても、めったに結果を出しません。
- **道路での入植者の暴力**：入植者はパレスチナ人の車に石を投げ、道路を無罰で封鎖し、車両や乗客を攻撃することさえあります。イスラエルの軍はしばしば傍観するか、入植者を保護します。

この断片化されたシステムでは、**移動の自由は存在しません**。村から村へ、病院へ、家族を訪ねる、商品を運ぶ能力は、絶えず変化する**軍事命令、入植者の攻撃、官僚的支配**のマトリックスに左右されます。

これは単なる不便ではありません。それは**計算された絞殺**のシステムであり、通常の生活を不可能にし、コミュニティを孤立させ、パレスチナ人を土地から押し出すように設計されています。

追放のメカニズム：入植者の暴力

占領下のヨルダン川西岸では、強制的な追放が常に公式の宣言や直接の軍事命令から来るわけではありません。より頻繁に、イスラエルの入植者によって組織された、ゆっくりとした、計算されたテロのキャンペーンを通じて展開されます。このキャンペーンは、容認され、保護され、最終的にはイスラエル国家の全機械によって支えられています。この暴力はランダムではありません。それは体系的で、戦略的であり、パレスチナ人を土地から追い出すことを目的としています。

プロセスは通常、3つの段階で展開します：

1. 威嚇と私有地の侵入

最初の段階は、入植者が招かれざる客としてパレスチナ人の所有地に入ることから始まることが多いです。彼らは昼間に、時にはグループで、しばしば武装してやってきます。パレスチナ人の家族の家に入り、リビングルームに居座り、あたかも自分の家であるかのように振る舞います。キッチンから食べ物を食べ、家族を侮辱し、人種差別的な罵声を浴せ、家具を壊し、窓を割り、グラフィティをスプレーしたり、床に尿をかけたりします。これらの行為は非常に屈辱的であり、プライバシーの侵害だけでなく、支配と恐怖を植え付ける意図的な試みです。

このような侵入は孤立した事件に限られません。それは繰り返され、標的にされ、住民の意志を破ることを目的としています。メッセージは明確です：「これはもうお前の土地ではない。」そして、パレスチナ人は抵抗すれば、侵入者を撃退したことではなく、「扇動」や「入植者への襲撃」で逮捕、負傷、またはそれ以上の危険にさらされることを知っています。

2. 生計の破壊

威嚇が家族を追い出すことに失敗した場合、入植者はしばしば彼らの生存手段を標的にすることでエスカレートします。数十年にわたるオリーブの木を切り倒し、それは収入だけでなく文化的な遺産の象徴でもあります。作物に毒をまき、根こそぎにし、群れを散らし、羊を盗むか屠殺します。イスラエルが支配する水道網にアクセスできない農村地域で不可欠な水タンクや灌漑パイプは、破壊されたり、穴だらけにされます。井戸は石やコンクリート、ごみで埋められます。

この破壊はランダムな破壊行為ではありません。それは農業生活を不可能にするための戦術です。作物、畜産、水がなければ、パレスチナ人の家族は他の場所で生存を求めて土地を放棄せざるを得ません。目的は傷つけるだけでなく、土地から人々を一掃することです。

3. 取り壊しと放火

最後に、パレスチナ人がまだ去ることを拒否すると、入植者は家そのものを標的にします。時にはブルドーザーや掘削機を持ち込みます。時には夜に家に火をつけ、家族を中に閉じ込めるか、何も持たずに逃げることを強制します。ビデオや目撃者の証言は、家が焼かれ、持ち物が盗まれ、村全体が灰に変わる様子を記録しています。

この破壊はしばしば明確なパターンに従います：ある日には火事や取り壊し、翌日には前哨基地の拡大です。土地が一掃されると、入植者はトレーラー、フェンス、シナゴーグを建てます。これらの違法な前哨基地は、道路、電気、水に接続されます。それらは迅速に「正常化」され、イスラエル軍によって保護され、最終的にはイスラエル政府によって遡及的に合法化されます。

無罪と抑圧

これらの各段階一家の侵入、生計の破壊、取り壊しで、パレスチナ人へのメッセージは同じです：去るか、破壊されるか。

そして、すべての場合において、**無罪が保証**されています。パレスチナ自治政府はこれらの地域に管轄権がなく、イスラエルの報復を招くことを知っているため、入植者と対峙する勇気はありません。**イスラエル警察と軍**は通常、見ず知らずを装います—パレスチナ人が抵抗しない限り。その場合、反応は迅速です：逮捕、殴打、実弾、軍事襲撃。抵抗は犯罪化され、入植者の暴力は言い訳されるか否定されます。被害者は正義を求める手段がありません。

現れるのは、入植者にとっての無法とパレスチナ人に対する法の戦争—無罪と抑圧の二重システムです。入植者は併合の先兵として機能し、イスラエル政府がまだ公然とできないことをします：パレスチナ人を強制的に土地から排除すること。

これは自発的でも自然的でもありません。それは政策です。方法です。民間人によって実行され、国家によって認可され、軍によって強制される追放の戦略です。

水を武器として

生命の最も基本的な必要性である水は、ヨルダン川西岸で支配の道具となっています。戦術は時間とともに進化しましたが、戦略は同じです：パレスチナ人の存在を持続不可能にすることです。水を戦争の武器として使用すること一かつては明白で生物学的だったが、今は構造的でインフラ的－は、イスラエルの占領体制の礎です。

歴史的類似点：毒から支配へ

ナクバの初期、イスラエルの民兵と科学者はパレスチナの民間人に対する生物学的戦争を計画し、時には実行しました。最も悪名高い事例の一つは、パレスチナの村の井戸にチフス菌で毒を盛って難民の帰還を防ぐことでした。これは神話や反ユダヤの「血の讒言」ではありません－それは十分に記録された歴史的事実です。イスラエルのアーカイブは、**1948年のアクリとアイン・カリム村**での水源が意図的に汚染された事件を含む、これらの作戦を確認しています。

この行為の恐怖は、ユダヤの歴史におけるその反響によって増幅されます：アンネ・フランクは、ガス室ではなく、ベルゲン・ベルゼンでのチフス、水を介して感染する病気で死にました。ホロコーストの犠牲者を代表すると主張する国家が、後に他の民族に対して同様の戦術を使用することは、歴史のグロテスクな皮肉です。

現代の戦術：破壊行為と盗難

今日、戦略は生物学的戦争からインフラの妨害と盗難に移行しました。入植者は－しばしば無罪で、時には軍の保護の下で－ヨルダン川西岸全体で**パレスチナの水システムを破壊します**：

- 彼らは共同の水タンクで泳ぎ、供給を汚染します。
- 灌溉パイプを破壊し、泉へのアクセス道路を封鎖します。
- 屋上の水タンクに穴を撃ち、乾燥した夏の暑さで何千リットルもの水を失います。
- 井戸を石、コンクリート、ごみで埋め、使用不能にします。

2025年7月、入植者はエイン・サミア近くの30以上のパレスチナ村の水供給を転用しました－重要なニーズを満たすためではなく、近くの入植地のプライベートプールを満たすためです。コミュニティ全体が唯一の淡水源を失い、入植者は豪華に浮かんでいました。これは怠慢ではありません。それは優越の宣言です。

制度的支配：メコロトと軍事命令

入植者の破壊行為は、イスラエル国家の水資源支配のより広いシステムの中で－そしてそれによって強化されて－行われます。この体制は、1967年の占領開始から数週間後に発令された**軍事命令158号**に根ざしています。それはパレスチナ人が新しい水インフラや修理のための許可を得ることを要求します。これらの許可はほとんど認められません。

イスラエルはヨルダン川西岸の水資源の約80～85%を支配し、主要な帶水層、泉、井戸を含みます。国家水道会社、メコロトは配給を監督します。その結果は深刻な不平等です：

- 抽出された水の**52%**がイスラエル本土に送られます。
- 32%**が入植地に—国際法上違法—送られます。
- ヨルダン川西岸の数百万のパレスチナ人**にはわずか**16%**が残されます。

入植地は緑豊かな芝生、灌漑された農場、プールを享受します。一方、パレスチナの村は水を配給し、時には1人当たり**20～50リットル/日**しか受け取らず、**世界保健機関が推奨する最低100リットル**をはるかに下回ります。

帯水層の略奪と生態破壊

最も重要な水源の一つは、ヨルダン川西岸とイスラエルにまたがる**山岳帯水層**です。パレスチナ人に禁止されている先端技術を使用したイスラエルの深井戸掘削は、帯水層が持続的に供給できる量をはるかに超えて抽出します。この過剰抽出により、**ヨルダン渓谷**を中心に、多くの**パレスチナの井戸が干上がり、塩分化**しています。

アル・アウジャやバルダラなどの村では、伝統的な農業がほぼ不可能になりました。かつて繁栄していた畠は荒れ果て、牧畜者は脱水のために家畜を売却せざるを得ません。土地そのものが死につつあります—これは**アパルトヘイト**だけでなく、**生態破壊**です。

雨の犯罪化

空さえ自由ではありません。パレスチナの農村コミュニティで何世紀にもわたる**雨水収集**は、しばしば犯罪化されます。許可なく貯水槽を建設したり雨水を収集するパレスチナ人は、**破壊命令**、罰金、没収の危険にさらされます。イスラエル当局は、「無許可」と見なされる地域で数十の貯水槽を破壊しました。悪名高い事例では、兵士がベドウィンの村の**雨水タンクの壁を突き破り**、集めた水が砂に流れ出しました。

水は力

この水の武器化は不足についてではありません—それは力についてです。イスラエルは共有するのに十分な水を持っています。パレスチナ人に否定されているのはH₂Oだけでなく、**尊厳、持続可能性、そして彼らの土地に留まる権利**です。水を支配の道具と優越の象徴に変えることで、占領は日常生活を疲弊させ、屈辱的な生存のための闘争に変えます。

これは環境管理の失敗ではありません。それは戦略的剥奪—パイプとポンプを通じて戦う戦争であり、不要と見なされる人々の生活を不可能にすることを目的としています。

生態の変容

イスラエル人はしばしば、聖書のレトリックを引用し、自身を「帰還した先住民」として位置づけ、土地との深い祖先のつながりを主張します。しかし、彼らの生態学的足跡は異なる物語—人々だけでなく自然そのものの暴力的な移転の物語—を語ります。景観は、環境に根ざした

本物のつながりではなく、植民地入植のイデオロギーを反映するために強制的に再形成されています。木々でさえその嘘を証言します。

在来の生命の根絶

何世紀にもわたり、パレスチナの村は地元の気候と地形に深く調和した農業で自らを支えてきました。千年以上も古いオリーブの木は、連續性と文化の生きたアーカイブとして立っていました。柑橘類の果樹園、イチジクの木、ザクロの林、段々畑の丘は、人間の生活と地中海の生態系の繊細な調和を体現していました。

しかし、ナクバと継続する土地の略奪の後、これらの在来の木は**文字通り根絶**されています。場合によっては、除去は戦略的です：オリーブ畠は入植地や軍事ゾーンのための土地を確保するために破壊されます。他の場合では、**民族浄化の証拠を隠す**ために消され、パレスチナ人の家の廃墟を森林のファサードの下に隠します。イスラエル国家とユダヤ民族基金（JNF）のような機関は、在来種ではなく、**ヨーロッパの松**—急速に成長し、不毛で、地域に異質な一を使った大規模な植林キャンペーンを主導してきました。

生態学的植民地主義

これらの松は果実を結びません。地元の食糧システム、野生生物、生物多様性を支えることはできません。さらに悪いことに、樹脂と針の落下を通じて**土壤を酸性化**し、在来植物を支える栄養素の微妙なバランスを乱します。かつて肥沃だった土地は農業に敵対的になります—ハーブ、野菜、オリーブ、カロブ、アーモンドなどの在来の木は根付くことができません。

これは単なる悪い環境政策ではありません。それは**生態学的植民地主義**—地元の知識や持続可能性から切り離されたヨーロッパの理想を反映するために土地を改造することです。パレスチナ人が命を育んだ場所に、イスラエルの政策は不毛を押し付けます。かつて食と意味を提供した景観は、今や可燃性を提供します。

自然の抵抗

しかし、自然も反撃します。ヨーロッパの松の单一栽培は**非常に可燃性**です—樹脂に富んだ針、乾燥した枝、密な成長パターンは火のための理想的な条件を作り出します。夏ごとに、**これら的人工林を野火が荒らし**、その周囲に建てられた入植地だけでなく、より広い地域を危険にさらします。火災はしばしば**町や前哨基地の大量避難**につながり、空を煙で覆い、広大な土地を焦げて使用不能にします。

これらの生態学的災害は、イスラエルの環境変革の持続不可能な基盤を暴露します。木は、壁や検問所と同様に、人々を消し去るためのものですが、そうすることで新たな脆弱性を生み出します。炎は入植者と国家を区別しません。それらは神話とともに森を焼き尽くします。

国際的な救済

火災が制御不能に燃え広がると—**カーメル山（2010年）、エルサレムの丘（2021年）、ガリラヤ（2023年）**で起こったように—イスラエルはしばしば**国際的な支援を訴えます**。ガザを包囲

し、パレスチナの土地を悔い改めずに併合する同じ国家が、**外国政府に消火機、装備、援助を懇願します**。皮肉は明らかです：土地を傷つけ、人々を追放する政策は、**国家自身の回復力を損なう**ものです。

焦土政策

在来の生態を外来で脆弱な生態系に置き換えることは、シオニストのプロジェクト全体のメタファーです：抵抗する土地、持続する人々、抑圧され続けることのできない自然の秩序に自身を接ぎ木しようとする植民地入植のイデオロギーです。木は単なる黙した証人ではありません。それらは犠牲者であり—そして、時には戦士です。

国際法の下での影響

占領下のパレスチナ領土の状況は、道徳的に擁護できないだけでなく、**法的に犯罪的**です。確立された国際人道法、国際人権法、拘束力のある条約の原則に基づき、ヨルダン川西岸と東エルサレムにおけるイスラエルの行動は、**多くの戦争犯罪と人道に対する罪に相当する重大な違反**の連続を構成します。

1. 違法な人口移転

1949年のジュネーブ第4条約、第49条6項は、占領国が**自国の民間人口の一部を占領地に移転すること**を明確に禁止しています。ヨルダン川西岸と東エルサレムに70万人以上の入植者を擁するイスラエルの入植地は、この規定の直接的な違反です。これらの入植地は単なる「論争中の近隣」ではありません—それは**占領地の体系的な植民地化**であり、第二次世界大戦後の国際法の最も基本的な規範の一つに違反しています。

2. 国際司法裁判所（ICJ）の助言的意見（2024年）

2024年、国際司法裁判所（ICJ）は、国連総会への拘束力のある助言的意見を発出し、以下を再確認しました：

- ヨルダン川西岸と東エルサレムのイスラエルの入植地は国際法上違法です；
- すべての入植者は撤退しなければなりません；
- イスラエルは長期の占領、土地の没収、資源の搾取、人権侵害に対してパレスチナ人に賠償を負う。

ICJはまた、**第三国はイスラエルの政策によって創出された違法な状況を認めず、支援しない法的義務がある**と繰り返しました。つまり、貿易、武器販売、外交的保護を通じての共謀は、それ自体が国際法の違反です。

国連総会はこの意見を**圧倒的多数**で採択し、慣習国際法の下で**強い法的重み**を与えました。助言的意見はそれ自体では執行力を持たないものの、**国際法のコンセンサスをコード化**し、既存の条約の下での国家の責任を確認します。

3. 天然資源の違法な搾取

1907年のハーグ規則（第55条～56条）およびジュネーブ第4条約に基づき、占領国は一時的な管理者として行動し、占領地の天然資源を恒久的に搾取または枯渇させることを禁じられています。

イスラエルの慣行—メコロトを通じたヨルダン川西岸の水の独占、パレスチナ人の帯水層へのアクセスの制限、入植者専用への資源の転用—は体系的な略奪を構成します。水の否定と農業システムの破壊は、国際刑事裁判所（ICC）のローマ規程第8条2項(b)(xvi)に基づく戦争犯罪である略奪に相当します。

4. 強制移住と住宅の破壊

国際人道法は、緊急の安全保障または人道的な理由を除き、強制移住を禁止し、それも一時的なものに限られます。ローマ規程（第7条1項(d)）は、「住民の強制移住または強制移転」を、広範または体系的な攻撃の一部として行われた場合、人道に対する罪として分類します。

イスラエルの日常的なパレスチナ人の住宅の破壊、シェイク・ジャラなどの地域での立ち退き命令、マサフェル・ヤッタなどの地域での強制移住—しばしば入植地の拡大や軍事ゾーンの宣言のために—はこの定義に明確に該当します。

5. 人道に対する罪としてのアパルトヘイト

イスラエルのヨルダン川西岸の体制の最も深刻な法的分類は、アパルトヘイト—制度化された人種的支配のシステムです。パレスチナ人とイスラエルの入植者は、完全に分離された2つの法体系の下で生活しています：

- パレスチナ人はイスラエルの軍法によって統治され、軍事裁判所で裁かれ、移動の自由を奪われ、集団的処罰を受けます。
- 入植者は、しばしば数メートル離れた場所に住み、イスラエルの民法によって統治され、完全な権利と保護を享受し、ほぼ完全な無罪で行動します。

この二重の法体制は、体系的な土地の盗奪、隔離、政治的権利の抑圧と結びつき、以下のアパルトヘイトの法的定義を満たします：

- 1973年のアパルトヘイト犯罪の抑圧と処罰に関する国際条約；
- ICCのローマ規程（第7条2項(h)）；
- そして慣習国際法、人種差別と支配を禁じています。

アパルトヘイトは政治的な非難だけでなく、人道に対する罪であり、それを設計、実施、または支援する者は国際的な訴追の対象となる可能性があります。

国際社会の義務

イスラエルのヨルダン川西岸の占領は、未解決の政治的紛争ではありません。それは**犯罪的企業**であり、暴力によって維持され、差別的な法律の網によって可能となり、国際法の基本原則の違反によって支えられています。法的枠組みは明確です：起こっていることは違法であり、世界は**明確な義務**—それを非難するだけでなく、行動する—を負っています。

これには以下が含まれます：

- 国連決議の執行；
- 國際的な調査と訴追の支援；
- 占領国への軍事、経済、外交的支援の終了；
- そしてパレスチナ人に対する**正義と賠償の確保**。

国際法は、それが執行されたときにのみ意味を持ちます。そしてパレスチナでは、その適用は長い間遅れています。

国際的な共謀と執行の失敗

パレスチナ人の正義、尊厳、自己決定の闘争は、しばしば局地的または地域的な紛争として描写されます。しかし実際には、それは**17世紀と18世紀のヨーロッパでの絶対君主制に対する啓蒙時代の闘争**を反映する、より広い歴史的弧の一部です。その当時、支配権力は、統治し、奪い、誰が生死を分かつかを決定する**神の委任**を主張しました。当時は神の意志を引用する王たちでしたが、今はパレスチナの植民地化と抑圧を正当化するために神の権利を引用する国家です。

かつて**王の神聖な権利**と呼ばれたものは、**入植者の神聖な権利**になりました。しかし、歴史の儀式的な遺物に大部分が変形したヨーロッパの君主制とは異なり、パレスチナに対するイスラエルの体制は、**抑制されない優越性の時代錯誤**であり、そのような虐待を防ぐために作られた機関によって責任から隔離されています。

安全保障理事会の麻痺

国連憲章第94条に基づき、**国連安全保障理事会（UNSC）**は、**国際司法裁判所（ICJ）**の判決を執行する主要な責任を負います。しかし、ICJが2024年の助言的意見でイスラエルの入植地が違法であり、解体されなければならないと宣言したとき、安全保障理事会は何もしませんでした。なぜか？**米国**—常任理事国—が、拒否権を使用して**イスラエルをすべての結果から保護**し続けているからです。

何十年にもわたり、米国はイスラエルの国際法違反を非難する**数十の決議に拒否権を投じ**、制裁、停戦、または独立した調査の呼びかけを阻止してきました。これは原則的な外交ではありません—それは**正義の体系的な妨害**です。その拒否権によって、ワシントンは安全保障理事会をパレスチナの権利の墓地に変えました。

ヨーロッパの偽善：ドイツとEU

米国が安全保障理事会で防衛を果たす間、**ドイツや他の欧州連合加盟国**はより巧妙にゲームを進めます。ナチスの過去に悩まされるドイツは、イスラエルへの無条件の支持を**国家の教義**とし、**国際人権条約**や**ジェノサイド条約**の下での法的義務に矛盾する場合でもそれを行います。イスラエルがガザを飢えさせ、ヨルダン川西岸のパレスチナ人を追放する中、ドイツは武器、資金、外交的保護を提供し、舞台裏で**EU全体の制裁や貿易制限を阻止**します。

これは、**国際法そのものをアパルトヘイトのシステム**に効果的に変え、執行は犯罪の重大さではなく、加害者のアイデンティティに依存します。ロシア、イラン、ミャンマーが行えば、**非難、制裁、訴追**を引き起こすであろう同じ行為が、イスラエルが行うと**聖化**されます。メッセージは明確です：**一部の命は他の命よりも価値がある**、そして一部の国家は法の上に立っています。

グローバルな正当性の危機

この偽善は、パレスチナ人だけでなく、**国際システム自体の信頼性**に壊滅的な結果をもたらします。ローマ規程が選択的に執行されるなら、どのような意味があるのでしょうか？国連決議が一部の国家には執行されるが他には執行されないなら、どのような重みを持つのでしょうか？ジェノサイドやアパルトヘイトの被害者が、**最も強力な国家が正義を公然と覆す**ときにどのような希望を持つことができるでしょうか？

これは共謀だけでなく、協力です。結果を阻止することで、これらの政府は中立的な観察者ではなく、**犯罪の積極的な助長者**です。

神聖な例外主義の神話の終焉

「**神の選民は間違えない**」という概念を終わらせる時が過ぎました—植民地化、大量追放、アパルトヘイトを言い訳するために**武器化された神話**です。歴史、宗教、アイデンティティに関係なく、どの国家も国際法を破り、人々を奪い、行動の結果から免除される権利はありません。

「**二度と繰り返さない**」という約束は普遍的であるはずでした。「ユダヤ人に二度と」ではなく、**誰にも二度と一決して**です。その約束は、**抑圧を正当化**するためにではなく、**防止**するために呼び出されるときに空虚に響きます。

世俗的かつ公正なグローバル秩序へ

今必要なのはレトリックではなく、**国際法がすべてに平等に適用される世俗的でルールに基づく国際秩序**です—同盟国、イスラエル、植民地入植体制を含む。正義は、恐れや好意なく法が適用されたときにのみ、スローガン以上のものになります。

世界はルワンダ、ボスニア、ミャンマーで長く傍観してきました。そして今、パレスチナで。毎回、国際法の機関が試されます。毎回、その失敗は被害者の血で書かれます。

歴史は沈黙を許しません。ダブルスタンダードを言い訳しません。外交に偽装した神聖な例外主義を容認しません。

行動する時が今です—パレスチナのためだけでなく、国際法自体の未来のために。

二国家解決の幻想

ガザでのジェノサイドが2年目に突入する中、世界中の多くの政府は、象徴的なジェスチャーで評判を救おうとしました—最も顕著なのは**9月の国連サミットでパレスチナ国家を承認**するとの新たな呼びかけです。しかし、壊滅的な暴力に直面したこの遅れた承認は、正義の真剣な行為ではありません—それは**ガスライティング**であり、**空虚な宣言で国際的な無行動を隠す方法**です。

二国家解決のアイデアはとっくに死にました。今、それは**平和への道としてではなく、イスラエルの最終破壊行為を可能にする煙幕**として復活しています。

条件付きの承認

いくつかの国家はパレスチナを承認する意欲を表明しましたが、**グロテスクな条件**の下でのみです：

- フランスはパレスチナ人に**武装解除**を要求し、包囲され、飢え、爆撃された人々に**最後の抵抗手段を放棄**することを求め、イスラエルが封鎖と違法な占領を続ける中です。
- 英国は、**イスラエルのジェノサイド攻撃の継続**を承認の条件とし、承認は「イスラエルの自衛権を支持する」ものでなければならないと述べ、たとえその「防衛」が**大量飢餓、強制移住、軍事占領**の形をとるとしてもです。

これは承認ではありません。それは**強制された降伏の申し出**です。パレスチナ人が従属、断片化、消滅を受け入れることを要求し、紙の上で認められる代償として—外交の残酷なパロディです。

一方、イスラエルはこれらの国家を非難し、「テロを報いる」と非難します。しかし、これは**黒い鍋がやかんを黒いと呼ぶ**ものです。

イスラエル国家のテロ起源

テロが非難されるべきなら、イスラエルの建国も含まれるべきです。シオニストの準軍事グループイルグン、レビ（「スター・ギャング」）、ハガナー**すべてイスラエル国防軍（IDF）の前身**一は、英国委任統治中に一連の暴力的な攻撃を行いました：

- **キングデビッドホテル爆破事件**（1946年）は91人を殺害しました。
- **国連特使フォルケ・ベルナドットの暗殺**（1948年）はレビによって平和の努力を止める目的としていました。
- **ローマの英國大使館**は1946年に爆破されました。
- 無数の橋、市場、アラブの村が攻撃され、破壊されました。

今日の基準では、これらの行為は明確に**テロ**として分類されます。しかし、イスラエルがこの暴力から生まれたとき、孤立も制裁もされませんでした—**西側に受け入れられました**。

メッセージは明確です：イスラエルが暴力を使用するとき、それは英雄的です；パレスチナ人が抵抗するとき、それはテロです。このダブルスタンダードは、国際的な言説を定義し続けます。

世界が話す間に事実を作る

世界の指導者が象徴的な承認を議論する中、イスラエルは現地で事実を作り続けます：

- ヨルダン川西岸と東エルサレムの違法な入植地は成長し続けます。承認はそれらを魔法のように除去したり、盗まれた土地を返したりしません。
- ガザでは、話している間にも人々が死にます。統合食料安全保障段階分類（IPC）は、壊滅的で不可逆的な第5段階の飢餓を宣言しました。赤ちゃん、高齢者、病人は食料不足ではなく、意図的な否定によって死にます。

食料アクセスが突然回復したとしても—それはされていませんが—ダメージは不可逆的です：

- 栄養不足の子供たちの脳は完全に発達せず、生涯にわたる認知障害につながります。
- 体系的に爆撃された学校や大学は、世代全体の教育へのアクセスを一掃しました。
- 心理的トラウマ、孤児、大量の切断は、現代の歴史で見られなかった痛みの遺産を生み出しました。ガザは今、世界で最も多くの子供の切断者を抱えています—誰も持つべきでないグロテスクな記録です。

この状況でパレスチナ人が武装解除すべきと提案することは、平和の提案ではありません—それは自殺協定です。地球上のどの民族も、体系的に飢え、爆撃され、消滅させられながら武器を下ろすことに同意しません。

承認は植民地化を止めない

国家の地位も保護を保証しません。シリアは、イスラエルがゴラン高原を奪い、後に併合したときに承認された国家でした。レバノンとイランは、イスラエルの空爆、暗殺、妨害の標的とされてきました。承認は攻撃者を完全な無罪で楽しむとき、攻撃を止めたことはありません。

ガザとヨルダン川西岸が2つの異なる問題であると装うことは、要点を完全に誤解することです。それらは同じ戦争の2つの戦線—パレスチナ人を消すための戦争です：

- ガザは飢餓と爆撃による消滅に直面しています。
- ヨルダン川西岸は入植者の暴力、水の盗難、軍事占領、忍び寄る併合によって絞殺されています。

両者は排除の一つの調整された戦略の一部です。

優越の下での共存は不可能

世界は、パレスチナ人が以下を行う者と共に存することをどのように期待できるでしょうか：

- 彼らの絶滅を公然と唱える；

- 彼らの子供を虐殺する；
- 彼らの水を盗む；
- そして彼らの廃墟の上に家を建てる？

武装解除が必要なら、それはイスラエル一占領国、核兵器の保有者、このアパルトヘイト体制の設計者一から始まるべきです。入植者が追い出した人々の存在に「不安」を感じるなら、彼らが来た国に帰るのは歓迎です。

作り上げられた歴史

シオニストの植民地化以前、ユダヤ人、キリスト教徒、イスラム教徒は共存していました—オスマン帝国の下で何世紀にもわたって。この脆弱な共存は、パレスチナ人ではなく、**政治的シオニズムのイデオロギー**によって破壊され、既に居住されている土地にユダヤ国家を創設しようとしました。

1933年、シオニスト運動はナチス・ドイツとハーヴァラ協定に署名し、経済協力を代償に何千ものドイツ系ユダヤ人のパレスチナへの移転を促進しました—ヨーロッパのユダヤ人反ファシスト抵抗への裏切りです。

人口動態の変革は有機的ではありませんでした：

- 1917年：パレスチナの～95%がアラビア語を話し、ヘブライ語を話すのは1%未満。
- 1922年：～6%がヘブライ語。
- 1931年：～12%。
- 1947年：～31%。

これは「帰還」ではありませんでした—それは植民地入植の変革でした。

イスラエルのコメンテーター、アヴィ・グリンベルグがXで暗いコメントをしたように：

「英國：9月にパレスチナ国家を承認します。」「それでいい。神が望むなら、9月には承認するものが何も残らないだろう。」

これが我々が進む道です。そして、世界が今行動しない限り一言葉だけでなく、結果をもって—その予言は現実となるかもしれません。

結論：中立の時代は終わった

世界は「二度と繰り返さない」と言いました。それは普遍的な約束であるはずでした—一つのジェノサイドの犠牲者だけでなく、すべての民、どこでも、常に。その約束は、ガザの瓦礫とヨルダン川西岸のブルドーザーで破壊された村の下に今、破壊されています。

証拠は圧倒的です。パレスチナで展開されているのは「紛争」ではありません。「論争」ではありません。それは、飢餓、追放、爆撃、生態破壊、アパルトヘイト法を通じて人々を消すため

の、意図的で体系的な努力です。ガザは飢えています。ヨルダン川西岸は村ごとに切り刻まれています。一緒に、それらは植民地化と消滅の単一のプロジェクトを形成します。

国際法は明確です。ICJは判決を下しました。条約は書かれています。協定は拘束力があります。欠けているのは知識ではなく、**意志**です。そして、この失敗が最も顕著なのは、**米国の拒否権**によってイスラエルを責任から守り、その犯罪を可能にした**国連安全保障理事会**の麻痺です。

しかし、進む道はまだあります。

国連総会決議377（「平和のための結集」）に基づき、常任理事国の拒否権によって安全保障理事会が行動に失敗する場合、総会は**その麻痺を覆す法的権限**を持ちます。緊急セッションを召集し、**集団的行動を推奨—武力の使用**を含む—して平和を回復し、国際法の重大な違反に直面する人々を保護できます。

総会は今、この力を**発動**しなければなりません。

それは以下を行う必要があります：

- **ジェノサイドが進行中であることを認識**；
- **ヨルダン川西岸のアパルトヘイト体制を非難**；
- **パレスチナ民間人の軍事的保護を許可**；
- そして**イスラエルの封鎖、占領、入植地の拡大の即時終了を要求**。

これは過激ではありません。それは合法です。それは必要です。そして、それは長い間遅れています。

国連は第二次世界大戦の灰の中から作られました。その憲章は、今我々が目撃する恐怖を防ぐために書かれました。今、子供たちが設計によって飢え、町全体が無罪で消されるときに行動できないなら、それは創設の使命に失敗したことになります。

国際社会は選択しなければなりません：法、正義、人間性—それとも例外主義、偽善、ジェノサイドの側に立つか？

パレスチナは試練です。そして歴史が見ています。